

# 私たちは高等教育をどのように変えていくべきか

一般社団法人 大学 ICT 推進協議会 (AXIES) 会長 青木 孝文



## AXIESの現状について ~ 右肩上がりの成長

昨年の12月10日～12日に奈良で開催されたAXIES2024年度年次大会は、登録者総数2,173名、初日の来場者数1,321名、出展社数106団体、発表件数128件を数え、文字通りたいへんな盛会となりました。交流会も圧巻で、会場の全体を見渡すことができないほどの盛況ぶりでした。大会の準備に奔走いただいた、実行委員会・プログラム委員会のみなさま、京都大学を中心とする関係各位に厚く御礼申し上げます。

法人としてのAXIESについては、この5年間で正会員が78機関、賛助会員が42社が増加し、それぞれ190機関、107社(2025年4月1日時点)に達しています。国内の多くの学協会とは対照的に、年々その活動の規模が拡大しており、事業戦略のアップグレードが必要な状況です。日本の高等教育が転換期を迎えつつある現在、デジタルの力で大学・研究機関の変革を牽引するAXIESの活動に、大きな注目と期待が寄せられています。

## 21世紀の4分の1が経過 ~ これから何が起こるのか

21世紀に入り今年末で四半世紀が経過することになります。あっという間でした。次の四半世紀はどのような時代になるのでしょうか。まず、日本の高等教育について、現在、18歳人口は約110万人ですが、2040年には一気に約74万人まで減少することが見込まれています<sup>[1]</sup>。この数字は、比較的最近に大幅下方修正されたこともあり、記憶に新しい方も多いのではないのでしょうか。

次に、テクノロジーに目を向けると、次の四半世紀で確実に到来しそうな技術的変曲点として、AGI、すなわち、汎用人工知能(Artificial General Intelligence)の出現があります。例えば、昨年、ノーベル物理学賞を受賞したジェフリー・ヒントン氏が、5～20年のうちに人間よりスマートなAIが実現する可能性があるかと予想していることは有名です。AGI登場までのタイムラインは専門家の間でも意見が分かれますが、いずれも急速に短くなる傾向にあります。よく使われる予測プラットフォームMetaculusでは、昨年末の時点で「あと約7年後」という予測でした。ちなみに、2020年頃は「およそ30年後」という予測でしたので、AIに関するランドスケープが急速に変化していることがわかります。

最後に、日本の社会全体の変化はどうでしょうか。最近、IGPIグループの富山和彦氏が興味深い数字を紹介しています<sup>[2]</sup>。まず、今後、さまざまな分野で人材が不足し、2040年には1,100万人もの働き手が不足することが予測されています<sup>[3]</sup>。一方、これとは対照的に、2035年にはDXやAIなどによって機械代替されるホワイトカラーを中心に約480万人の雇用が減少するという試算があります<sup>[4]</sup>。要するに、少子高齢化による深刻な働き手不足と、AI革命による雇用減少が同時に起こるわけで、「仕事はある。人材のミスマッチこそ問題だ!」ということになります。今後、日本の活路を見出すためには、人材のリスキングを進めてミスマッチを解消するとともに、あらゆる産業分野でデジタル化を加速して付加価値労働生産性を高める必要があります。

## 高等教育セクターに求められるもの ~ 次の四半世紀に向けて

以上のことは、私たちのコミュニティに対して、二つの点を示唆しているように思われます。第一に、AI時代に求められる人材育成／リスクリングの推進役として、高等教育機関が果たすべき役割はきわめて大きいということ。いよいよ「18歳」「対面」「国内」というこだわりを脱して、多様な人材を対象とする高等教育の新たなビジネスモデルを生み出すことが求められます。

第二に、そのような社会の要請に応えるためにも、デジタルを駆使した大学自体の事業変革（つまり大学DX）は、これからの大学にとって最も重要な経営課題の一つであるということです。例えば、労働市場変革に求められる人材育成／リスクリングを取り上げると、それを大学から誰もがアクセスできる形で大規模に展開するためには、デジタルの活用と規制改革が不可欠です。また、より広範な事務の効率化を目的とした業務DXは、すべての法人に共通する喫緊の課題でもあります。一方、研究大学・研究機関に目を向けると、AIがサイエンティストを代替する時代を見据えた研究DXの展開がホットなテーマになりつつあります。

## AXIESの将来を議論する年に ~ より大きなスコープ、より多様なメンバー

さて、昨年末の年次大会ではEDUCAUSEのJohn O'Brien会長をお招きして、米国の最新の状況をうかがいました。現在、EDUCAUSEでは、高等教育のリーダーたちが重視する課題を“2025 EDUCAUSE Top 10”として公表しています<sup>[5]</sup>。リストを上位から眺めると、1位「データで組織を強化」、2位「業務の改革と簡素化」、3位「学生に寄り添うサービス」、4位「信頼という問題」、5位「CIOの挑戦」、…と続きます。いずれも日本にも共通する大学経営の重要なテーマです。

次の四半世紀に向けて、私たちAXIESコミュニティの活動も、大学の教育、研究、社会連携、組織運営の全方位にスコープを広げ、各機関の変革に具体的にインパクトある貢献を果たすことが重要と考えます。また、AIなどテクノロジーの民主化に呼応して、ICT専門家以外の多様なメンバーの参画を促し、産と学はもちろんのこと、積極的に官の力をも取り込んだ新たな活動の在り方を模索するタイミングであるとも考えます。

ぜひ、この2025年が、皆さまとともにAXIESコミュニティの新たな発展方向を議論する節目の年になるよう祈念しております。皆さまの積極的なご参加とご協力をお願いいたします。

2025年4月1日

### 参考文献

- [1] 中央教育審議会，大学分科会・高等教育の在り方に関する特別部会（合同会議）  
[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo4/053/siryo/mext\\_01981.html](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/053/siryo/mext_01981.html)
- [2] 富山和彦，ホワイトカラー消滅：私たちは働き方をどう変えるべきか，NHK出版新書728，2024。
- [3] リクルートワークス研究所，未来予測2040 労働供給制約社会がやってくる  
<https://www.works-i.com/research/report/forecast2040.html>
- [4] 三菱総合研究所，スキル可視化で開く日本の労働市場 2035年にミスマッチ480万人—生成AIの雇用影響を乗り越える労働市場改革  
<https://www.mri.co.jp/knowledge/insight/20230913.html>
- [5] 2025 EDUCAUSE Top 10  
<https://www.educause.edu/research-and-publications/research/top-10-it-issues-technologies-and-trends/2025>